

## 肖像

小岡明裕

この悲劇が上演される時代の衣裳を採用のこと。

J・コクトオ

わたしは決して夢をみることはない。

幼年期の黄色い記憶の回廊を飾るモザイクのように、繰り返されることばの魚鱗の冷氣のなかで徐々に形のようなものをなしてくる女の顔をみる。

少女が前を歩いていて、耳なれぬことばの湧きだすところが急に懐しくなり、鳥の巣のような頭をした少女のあとを執拗につけてゆく。——夜がそのぶあついまぶたに幽閉していた少女。

視線は少女の踝に貼りついたまま、下着のように乱れたひとすじの文脈の地層を辿ってゆく。

「なぜ、あたしをつけるの？」

おまえがもっと子供だったとき、白亜紀の砂を踏む登音はおまえの錦蛇の踝から宝石のように転ったものさ。

半ば昏のように開かれたままの扉の背後に横たわる光の三角形、むきだしの白ちやけた床の上に、ほぐれてたなびく曖昧なことばの群。

懐しきは、そのためかどうか、湿った空気のなかを空疎な羽虫の群のように横へ横へと流れていてしまう。



わたしのなかには眠りつづける小さな庭園がある。噴水のざわめきや黄色の芝生、それらを短いまなざしで射る蠍のような誘惑の偶然のなれあいのなかにとどまろうとするわたし。

目星をつけて尾行する少女の夢みる足をしめつけているサンダルの迷路は、花瓶の底にふきだす緑青の花のようなことばの王国を踏みはずす。

よろめいて右の手を突きだすと、息をのむピロイドの闇の仄白い光のなかには、女の、眼を閉じて心もち上向きかげんの横顔が浮かび、スワンネックの曲線に沿って目をみひらきながらわたしの手の方に向き直ってくる。まるで、前方に突きだしたままつかみどころもなくさまよっているわたしの手が、彼女の行くべき方角を指し示してでもいるかのように。

世界は時間を見失う。それと同時に、わたしは額に彼女の額の接触を感じる。まだ名残りの星のきらめいている空の明るさのような接触。

「なぜ、あたしを追い越して？」

時間は世界を見失う。

束の間、西日に染みそめたことばの群雲に鋭い亀裂が幾条も走り、扉の向こうの扇形の光の塊りは、磨りガラスを透してみるようにほんやりと単彩にかすみ、追風が吹いて、ことばの裾はみだらにはだけて少女の踝をくまなくおおう。



「なぜ、あたしの影によりそうの？」

そのまま、声帯を別られたことばは女の柘榴のまなざしに乱反射し、目尻からはガラスのかさぶたが次々と剥れ落ちていくが、その落ちていくはては、わたしにはみえない。その瞬間の光の裏にたしかに、いつでも、踏破されることのない各瞬間に向きあって何かを待っているときのふくらみを感じていること、あるいはわたし自身がそのつつましい薔薇色のつぼみの束の間の曲率によりそうこと、そのときには覗きみられる背後の距離はいっせいに霧消する。作り笑いの口許に立ちつくしているわたしの右手が炸裂し、昏倒しながら、白亜の登音に沈んでいく。

墓のなかにまみれた己が髑髏に見惚れんがため、骨の指もて墓穴をまさぐり、重層する地層のなかよりほじくりだしたわが頭蓋骨をいとおしげに関する純粹な悪意が、見えるもの見えざるものとして、わたしの螺旋状の昏倒の明るみのなかにその正体をむきだしているいま、彼女の顔は、いわば永遠の期待にすぎぬのであろうか。

「なぜ、なぜあたしを見つめるの？」

光のなかに交錯した待つ女の後姿をみるのは夜である。犯すことをしないで犯される罪に貼りついて、女の顔はいつまでも闇の皮膚のうえに浮き彫りされている。またたきながら、舞台もまたたきながら、舞台裏も必要ではないということだ。扉のうしろにひとつ髑髏を配置するだけで

事足りる。

かくして陰画は額縁ともども闇にかき消える。

純粹な影が女の顔によみがえってきて、——おお、遁れ去るべき夜の遺骸よ——その気高い鼻梁をひときわ美しいものにする。

伝説の牛がいまなお反芻している白紙のうえでは、踏みまよった古の少女の双踝がむつみあっているが、闇ではない夜の底に沈められ、永久に消え失せるために、待つときのふくらみで瞳をこらすと、女の顔はかすかに頬笑んでいる。

だが、夜の運命をかくぐって照り返されている落日、その淡いシルエットをかすかにふるわせ、長い睫毛の尖端の何か小さな球体に宿るこまやかな時のざわめきのことなど思いはしない。首飾りの真珠にひろがる七つの海は、いつになく女の顔を暗くしてわたしをひきつけている。

夜ではなく、闇によって分割された切れ切れの冷笑の彼方、時の横顔へ、いま、あわただしくかりたてられる永遠の一步。

le 25 octobre, 1983.